幼児のうたう活動についての一考察

―どなってうたうことを中心に―

小木曽　敏　子

はじめに

幼稚園での教育実習を終えての学生の報告で，音楽リズムのうたう活動に関するものでは次のようなことが問題として出てくる。子どもがうたうという行為の特徴とその扱い方，子どものうたう声について，歌唱教材について，自分の表現技術についてなどである。学生の報告は自由記述形式で書かれたものであるが，そのうちの75％の学生が幼児のうたう声について記しており，32％の学生がどなってうたう現象に直面した時の対応のむずかしさを痛感している。しかしこれは実習した学生だけの問題ではなく，幼児教育に携わっているすべての大人，保育者にとっても問題となるところであろう。

本稿では，幼児のうたう活動における声，特にどなってうたうことを中心に，直接に幼児に関わっている保育者からの資料と事例からみていきたい。

Ⅰ　うたうということについて

「人間はすばらしい楽器を持っている。それはのどだ」とは Zoltán Kodály の言葉である。歌は人間が最初にはじめる音楽であり，いつでも，どこででも自由に楽しめる最高の音楽である。Toscanini がオーケストラの練習中に最も多く口にした言葉は「Cantare!」であったという。このことは，うたうという行為がすべての音楽活動の場においての中核となるものであり，基礎であるということを物語っている。そしてその基本的なねらいは，歌唱の技術面にあるのではなく Musizieren 音楽する喜びを発展させていくためのうたうであることを示している。

広辞苑（第一版　昭和30年版）によると「うた」の項には次のように書かれている。「拍合ふ」が「うたふ」に約まったもので，歌いつつ手を拍合うことによるという。また，「うつけ」「うつろ」などの空漠の義から生じたとも，「訴ふ」に基づくものともいう（折口信夫説）。（現在使用されている広辞苑やその他の辞書には，この記述は見られない）

拍合うは動的・生理的・身体的な表現であり，訴うは静的・内的・心理的・精神的なもののあらわれである。即ち心体すべてでうたうということである。

人間にとって音楽するということは，うたうということからはじまる。一番身近にあり，どこへでも持って行け，どこででも演奏ができることについては先に述べた。

ＮＨＫの放送世論調査によると，日常鼻歌をうをうたうことがある人が80％で（女性の方が多い），殆ど・全くうたわない人が20％である。ちなみにカラオケや余興で歌をうたうことのある人は42％で（男性の方が多い），殆ど・全然うたわない人が57％だという。

うたうことは１人でも大勢とでも，言葉が通じなくても，年令や男女の関係もなく楽しめる。そして，自分も満足し仲間との一体感と感動を得ることができる。また，前出のＮＨＫ放送世論調査では弾き語りをする人は19％，しない人は81％で，その使用楽器はピアノが51％，ギター42％，ハーモニカ41％となっている。

うたう人が80％を占めたのに対し，楽器を使ってうたう人は19％である。何か楽器を使ってとなると演奏技術という関門にひっかかり，ある程度の技術習得がなされていなければ一歩も先へ進めないことを示している。まして解放感・満足感・感動をその能動的行為から得ることはできない訳である。

家庭で父や兄がハーモニカをコード付きで吹いている姿，その隣でじっと聞き入っている子どもの図などはみられなくなった。しかし，歌をうたって楽しむ大人がふえ，そのうたっている姿に充足感が見える。うたうという行為がストレートに表現活動と結びついている。

幼児の場合も，音楽活動の中心の核はうたうことにある。音楽するための諸能力が心身共に十分整っていない幼児の段階では音楽したことを実感できる活動は，直接自分の身体を使って鳴らす活動である。従ってうたう行為には同時に身体動作が伴う。これが子どもの音楽である。

うたう行為は子どもの内部からの心の働きかけと，外部からの働きかけによっておこる。この音楽的な行為はさらに今までの音楽的経験に働きかけて，その経験に量的にも質的にも変化を与えていく。

うたうという音楽的行為をおこさせるためには，何らかの刺激を与える必要がある。そのために，子どもの今までの音楽的経験をとらえ，そこにいつ，どのような刺激を与えたらよいのかを把握することが大切になる。また内部からの刺激とは何か，そしてそれがどのようにして生じたのか，刺激に対する子どもの反応をどうみるかなど保育者の子どもを見る目が鍵であろう。

うたうという行為は，意識的にせよ無意識的にせよ何らかの刺激によってあらわれる行為である。生理的快感，肉体的解放感，精神的快感，精神的解放感，感動，うたうこと自体の楽しかった経験，成功感，得意な気分，満足感または失敗感その他さまざまな感情が刺激となる。しかしこの刺激もその時々の心身の状態，受け入れ準備の状況などによって相違がでる。ここに，何を・いつ・どのようにそして何のために指導するのかという問題がおこってくる。

指導というと，じょうずにうたえるように，みんなでいっしょに声を合わせてうたわせたいなどと指導者が一方的に，まず目標を定めてしまう。

しかし，うたいたい，または子どもが積極的にうたおうとする雰囲気を作り出すのが第一の仕事であろう。うたうことが楽しいと実感できる場が必要である。楽しいと感じること自体は，教えることはできない。うたいたいという意欲が表現を作りあげる。その表現にあきたらなくて，もっと違うようにうたいたい，もっともきれいにうたいたいなどの要求が出てきた時に，テクニックが必要になる。ここではじめて保育者の指導が行われる。

音楽活動の主導権は，あくまでも子どもの側にありたい。そしてそれらの基準を子ども側に置きたい。

Ⅱ　子どものうたう声について

うたう行為は次の発声に関係する諸器官を使って行われる。

イ　呼吸器官―肺，横隔膜，その他呼吸筋

ロ　発声器官―喉頭（真声帯，仮声帯，モルガニー氏喉頭室，上候頭腔）

ハ　音声調節器官―咽頭腔（上・中・下）口腔（唇・歯・舌・硬口蓋，軟口蓋，懸壅垂），鼻腔

しかし，この諸器官の筋肉を緊張させてどなっ

たりすると，強い呼気圧により声帯が赤く腫れ，さらに進むとそのひだが鋸歯状となって内部から良質繊維質が増殖して突起状になる。そのために声門がぴたりと閉じることができなくなって，声がかれるという現象がおきる。それが進行してポリープとなり，声域が狭くなったり，限局性声帯，結節となって手術を要することになったりもする。

品川三郎は，児童は頭声発声であるべきだとし，そのための弱声時代を重視している。弱声にうたおうとする努力が，実は声帯と付属器官の調和的な使用法を自然に会得することになるという。せめて静かに柔かにうたうことだけでも意義があるといっている。

Maskell Hardyは，一般に幼い子どもには，その声が相当に訓練されるまでは，大声でうたうことを決して許してはならないといい，「元気な」うたい方，「自然な」うたい方という迷惑至極な迷信の犠牲を子どもがこうむっているといっている。

Forrai Katalinは，大声でうたうのは間違っている。やかましい音が好きな子どもたちにも，静かな音や柔かい音にも注意は向けさせることができる。小さな柔かい声でも，はつらつとしたテンポでうたえる。音楽的な声を作るために，せいぜい中位の大きさの声で，むしろ小さい声でうたわせるようにとハンガリーの保育園の指導者に呼びかけている。

一方，James L. Mursellは，声の正しい使い方とは自然な使い方である。うたうことの価値は真摯な感情の積極的な体験である。美しい頭声でなくても，歌唱指導はうたうものを感じ，また感じたものをうたうように導いていくことが大切である。小さくうたえということは常に神経質な状態を作り，自由にのびのびした自然な反応を妨げるので，音楽に対する身体的感知が崩れ去ってしまう。声の大きいか小さいかではなく，身体的な気楽さや身体的調整をねらうべきである。そして，幼児期に技術的能力をしっかりつけておきたいという願いのために，多くの価値あるものが犠牲にされ，成長がゆがめられているといっている。

成田為三は「りすりす小栗鼠」の解説で，「幼稚園又は小學校初年級の極可愛い子供の曲だから，高さと長さとを完全にして下されば，アトは子供の心に任せて大聲でスルスルット歌はして下されば結構です。強弱記号は景品として書いてある位に思って下さってよいです。」（原文のまゝ）と書いている。(註)

子どものうたう声については，大人のいわゆる西洋音楽の声楽における発声と全く同様に考えることはできない。声楽は発声諸器官の訓練なしには考えられない。その身体的条件が未発達の幼児には，呼吸法一つをとってみても無理なことがわかる。息を吸っても肺活量が少ないのですぐブレスが必要になるから，歌はこま切れになってしまう。そのために吸気法（横隔膜を下げるなど）や呼気法（息の支えなど）を感得するのだが，まだその力が備わっていない。身体的にも精神的にも発声訓練指導を行うには未熟である。

また，発声からみて西欧米人と日本人とは違いがある。共鳴のさせ方，つまり喉頭への息のあて場所なども，寒い地方の民族と暖かい地方の民族（日本も含む）とでは異なる。言語や発音と発声とも密接に関係する。話し声とうたう声との関係も違っている。このことは西欧諸国と日本との町中の音，人の集っている所での声量の違いからもうかがえよう。

声に関する文献を読む時，日本人の，そしてその幼児期にある子どものうたう声について考える時に，いつも心しておかねばならないことではないだろうか。

Ⅲ　うたう活動についての調査

1　方法　ききとり調査

2　設問　次の項目について自由に答えてもらう形式をとった。

(1)　子どもたちはうたうことが好きです

か。

(2)　うたうことが好きな子に性差がありますか。

(3)　うたう人数について。

(4)　どなってうたう原因となる条件はなんだと思いますか。

(5)　子どもがどなってうたった時の対応で，保育者はどんなことばがけをしますか。

(6)　どなってうたった時，ことばがけ以外で効果的と思われる方法は何がありますか。

(7)　以上のような方法で指導した後の子どもたちの様子はどうですか。

(8)　子どもの望ましい歌声とはどういうものだと考えますか

(9)　その他，どなってうたうことについて

3　対象　保育所保母および幼稚園教諭41名

調査対象になった保母および幼稚園教諭の経験年数は，5か月から15年5か月までとさまざまである。5才児担任が14名，4才児担任が6名，3才児担任が30名，4・5才児混合クラスの担任が1名である。

4　結果と考察

(1)　子どもたちはうたうことが好きですか。

大好き	1名
好　き	30名
まあまあ好き	2名
好きな子と嫌いな子に分れる	4名

好きと答えた者のうち約半数は一瞬考えてから答えている。子どものどの姿を好きとみるか，好きという判断の基準をどこにおくかを考えたためかとも思われる。

(2)　うたうことが好きな子に性差がありますか。

性差はない	14名
どちらかと言えば女の子の方が好き	13名
女の子の方が好き	1名

性差はないと考えた者と女の子の方が好きと答えた者の数が同じになった。

好きと判断するのに，女の子の方がはやく憶えるという言葉を付加した者が多かった。好き⇄はやく憶える　という図式が成り立つかもしれない。

(3)　うたう人数について

クラス全員で	27名
クラス全員でうたうがグループ毎でうたうこともある。	7名
クラス全員でうたうし，全園一緒にうたう	3名
1人でうたう機会はない	15名
1人でうたう機会が時々ある	7名
1人でうたう機会がある	5名
1人でうたう機会はよくある	1名

1人でうたう機会については，うたいたい子どもが前に出てきてうたう形をとっているものが殆どである。従って，1人でうたった子どもが喜んでうたっていたと答えた者が13名中10名あった。

うたう人数の違いと声の質の差について，その相互間に関係はみられなかった。1人またはグループによる少人数でうたう場合，やりたい子どもやうたいたい子どもが友だちに聞いてもらうという形をとっているからであろう。意図的に比較的少人数でうたわせて，その人数による差をみれば結果は異なるかもしれない。

しかし今回の調査で担当園児数の多少と，どなってうたうことについての関係は

（別表１）

どなってうたう原因となる条件（155名）

精神的要因（56名）

うれしい	4名
張り切っている	2
ほめられて	1
気合が入っている	1
参観日など	1
思い切りうたっている	1
一生懸命	1
大きい声を出すのがうれしい	1
久し振りにその歌をうたった	1
休みあけの時	1
その日の気分で	1
調子づいている	6
はしやぐ	5
ふざける	4
イライラしている	3
うたう前に発散していなかった	2
遊びたい	1
強制された	1
うたう気がないのにうたわされた	1
気持がのらない	1
あきてしまった	1
単に面白がって	2
友だちとの競争心	9
目だちたい	3
先生の気をひきたい	1
注意してもらいたい	1

歌唱教材が要因（36名）

好きな歌	4名
テレビの歌	2
うたいたい歌	2
好きな部分	2
面白い歌	2
はずむ曲	2
元気な曲	2
軽快な曲	1
のれる曲	2
アクセントのつく歌	2
強弱の差の大きい歌	1
高音域まである歌	5
朝の歌　お帰りの歌	4
歌詞の長い歌	1
長い歌	1
退屈なうた	1
面白くない歌	1
うたいたくない歌	1

保育者側の要因（35名）

元気よく	18名
大きな声で	15
声が小さい	2

音楽的な要因（18名）

慣れた曲	8名
曲にのっている	2
その歌を喜んでいる	2
その歌の気分になっている	1
安心できる歌	1
うたい込んだ歌	1
歌詞をよく知っている	1
声が前に出ている	1
歌がうまくうたえない	1

発達段階が要因（７名）

３才から４才前半まではどなる	3名
調節ができない	1
腹式呼吸などはまだわからない	1
どなるということがわからない	1
どなるときれいにの区別がつかない	1

子ども側の要因（３名）

話し声が通常大きい	1名
遊びの時にリーダーになれない	1
日常動作が乱暴	1

みられなかった。また，解答者もうたう人数とどなってうたう現象とは関係がないと思うと答えたものが多かった。

(4)　どなってうたう原因となる条件はなんだと思いますか。（別表１参照）

精神的要因	56名
歌唱教材が要因	36名
保育者側の要因	35名
音楽的な要因	18名
発達段階が要因	７名
子ども側の要因	３名

どなってうたう子どもは殆どの場合，１クラスの中に１名から３名ないし４名であって，それにつられて数がふえたりしている。

原因の発生源が子ども自身にあるもの

と，保育者の影響によるものとに分けてみると，前者が73％を占める。また，後者のうちの83％は保育者のことばがけによるものである。そしてそのことばは「大きな声で」「元気よく」「声が小さい」である。

どなってうたう原因のうち，子どもの気持が前向きであったと思われるもの63名，子どもの心がうたう活動の方向には向いていなかったと思われるものが39名であった。

別表1によると幼児のうたう行為が，満足感，開放感，安心感，得意感，不満の発散，競争心など子ども自身の内面的静神的な状態によって，より大きく表現活動に違いを生じてくることがわかる。

(5) 子どもがどなってうたった時の対応で，保有者はどんなことばがけをしますか。（別表2参照）

声の質の面から	32名
身体的側面から	26名
イメージの面から	8名
子どもに投げ返す	2名
音楽的側面から	2名

（別表2）

どなってうたった時のことばがけ（71名）

声の質の面から（32名）

きれいに・きれいな声で	12名
やさしく・やさしい声で	11
いい声で	4
気持のいい声で	2
気持よくうたおう	1
普通の声で	1
それはいい声ではない	1

身体的側面から（26名）

のどを痛める	12名
のどをつめないで	1
のどに力を入れないで	1
口を大きくあけて	5
口を丸い形にして	1
おなかに力を入れて	1
オヘソに集中させる	1
きちんとした姿勢で	1
耳が痛くなる	2
耳をふさいでいる友だちがいる	1

イメージの面から（8名）

○○みたいに聞こえた	3名
怪獣みたい	1
おこっているみたい	1
おこられているみたい	1
元気よく	1
○○でなく	1

子どもに投げ返す（3名）

それでいいのかナ	2名
いゝ声ではなかったみたい	1

音楽的側面から（2名）

歌が喜ぶような声で	1名
内容とちがっている	1

（別表3）

ことばがけ以外で効果的な方法（23名）

保育者が示す（10名）

2種類の声でうたってみせる	4名
うたってみせる	4
内容を説明する	1
イメージをふくらませる	1

気がつくようにしむける（4名）

もう一度考えさせる	2名
途中で歌を止める	1
ピアノ伴奏を小さくする	1

よくきかせる（4名）

向かい合ってうたわせる	1名
グループ・友だちの歌をきく	1
録音してきく	1
遠くを見てうたわせる	1

身体の形態から（4名）

身体をきちんとさせる	1名
身体を動かす	1
にぎりこぶし大の口をあけさせる	1

その他（2名）

うたい込ませる	1名
1人がやめれば皆もやめる	1

(6) どなってうたった時，ことばがけ以外で効果的と思われる方法は何がありますか。（別表3参照）

保育者が示す	10名
気がつくようにしむける	4名
よくきかせる	4名
身体の形態から	3名
その他	2名

どなってうたった時に保育者がことばがけやその他の方法で子どもに注意をうながしても，それは永続するものではない。どならなくなってもそれはその時限りで，次回にはまた同じ状況がみられるという解答があった。これがこの時期の子どもの姿である。常にその時々をとらえて何回でも保育者が対応していくのが，最良の方法だと考える。そしてそれは，子どもにわかる表現方法ではなされることが大切なこととなる。

Forrai Katalin は，柔かいうたい方，固いうたい方，良いうたい方，悪いうたい方などを指導者はひんぱんに子どもたちに実演してみるべきだといっている。

幼児に発声の知識は不用であるし，のどをつめないようにとか，のどに力を入れないようにとのどに子どもの注意を向けると，かえって意識してしまってどうしたらよいかわからなくなって子どもを混乱させることになるだろう。のどとか声帯または横隔膜など目で見ることができないものを使うことのむずかしさは，専門家でさえ感得するというほかに手段がないのである。

また Victor Fuchs は，子どもたちは大きな声を出したいからであろう，しばしば口をあけすぎる。特に日本人の場合は，口をあけすぎると不自然に舌根がつり上り，響きを失って固い声になることが多いといっている。

(7) 以上のような方法で指導した後の子どもたちの様子はどうですか。

変る	39名（別表4参照）
変らない	2名

変ったもののうち保育者が意図した方向へ変ったものが26名，マイナスに変ったと答えた数は13名となっている。

（別表4）

指導後うたい方が変った子どもの様子（39名）

どならなくなった	18名
普通の声にもどった	3
気をつけてうたう	2
きれいになった	1
大きい声だがつぶさないでうたう	1
質が変った	1
小さい声になった	7
おさえてうたう	2
おとなしくなった	1
普通とはちがう	1
ノビノビしなくなった	1
どなっていた子がうたわなくなった	1

どなってうたうことに対して大人は，のど（声帯）を痛める，ふざけている，ふまじめだなどとマイナスのあらわれとしてとらえがちである。しかし，それでは子どもの姿を十分にとらえていないことになる。

子どもたちが，自分の中に音楽をとり込んで十分にうたったあらわれとしての声を張りあげてうたう現象をみる時，保育者は幼児の発声について目を向けることが求められる。

自分の感情を歌声であらわすのに，その方法がわからない子どもたちを目の前にして，幼児の発声に関する問題が浮上してくる。

(8) 子どもの望ましい歌声とはどういうものだと考えますか。（別表5参照）

声のイメージでは	21名
声の大小では	7名
身体的側面では	4名

音楽的側面では　　4名

（別表5）

子どもの望ましい歌声（36名）

声のイメージでは（21名）

元気よく・元気な声	8名
どならない	4
無理のない声	2
明るい声	2
澄んだ声	1
ノビノビした声	1
子どもらしく	1
何気なく	1
そのまゝ	1

声の大小では（7名）

大きな声	5名
小さくなく	1
つぶやきの中から	1

身体的側面では（4名）

身体でうたう	2名
丸い口の形で	1
ニコニコ顔で	1

音楽的側面では（4名）

歌詞がわかるように	2名
正しくうたう	1
しっかりうたう	1

本稿のⅡ子どものうたう声についての項でいくつかの考え方をみた。しかしこれらは，外国と日本，欧米人と日本人との違いを抜きにしては考えることはできない。

それにしても，弱い声や小さな声でうたわせるべきだとの考え方は，うたう活動を声の音量の面からだけとらえているものと思われる。声量が乏しくなれば音楽を成り立たせる力が弱まり，歌をうたうという身体と直結した活動の喜びを失わせてしまうことになりはしないか。

(9)　その他，どなってうたうことについて，

・気持が入っていれば，または，楽しんでうたっていれば，大きな声でうたったり，はずれてうたってもかまわない。

・きれいな曲は，どなれない。

・やさしい感じの曲は，子どもの側で加減することができる。

・身体を十分に動かしている時（例えばリトミックなど）は，どならない。

・どなってうたったことを保育者が注意すると，してやったとばかりニコッとする。

音楽する，うたう活動に必要なことは，まず第一に音楽であろうとする姿勢である。メロディを早く憶えることや歌詞を正しくうたえることは根幹ではない。子どもがその曲に入り込めば，または，入り込める曲であれば，そしてうたいたい歌であれば自然な表現がでてくる。子どもが音楽を感じることができれば，音楽を感じることができる曲であれば，そして保育者が子どもの本当の姿をとらえてさえいれば，どなってうたうことについての悩みの大半は解消するのではないだろうか。

Ⅲ　事例 歌唱活動〝うみ〟にあらわれたもの

次の事例は，夏休みあけの本学付属幼稚園年長組でのものである。プールへ入る前にクラス全員で〝うみ〟（林柳波作詞　井上武士作曲）をうたった。そのうち1人の男の子が3拍子の頭の拍にアクセントをつけてうたい出したが，すぐに何人かが同調していく，彼は得意満面の中にも少しの不安の色を混じえて，ピアノを弾きながらうたっている担任を見，周囲の我々（実習生もいた）を見る。2番をうたう頃には，クラスの子どもたちの半数はその気になっていて，すさまじしいばかりのボリュームになった。

T：ちょっとおかしいよ。海ってそんなにすごい音がするの？　泳ぐところはもっと静かじゃない？

C^1：でも，海には大波だってあるよ。

C^2：台風の海ってすごいよ

C^3：今，日本に台風きてるんだよ

C^4：テレビですごかったの見た　　などなど。

この日の前日には，台風が九州に上陸して大荒れの様子がテレビで放送された。子どもたちはすぐこのことを思い出したのだ。自分たちは台風のすさまじさを体験してはいない。テレビで見ただけのものを，自分たちがうたった〝うみ〟に組み入れたのだ。そして暑い日だったが，うたっている彼らは保育室の中で床に坐っている。海辺ではない。

１人の男の子がはじめたこのアクセントをつけて精一杯声を張りあげてうたった行為を他の子どもたちも一緒になって進めている。耳を押えさてしまう子どもの姿も出たこの子どもたちの行為を，野蛮だ動物的だと見るか，または，可能性を秘めた生命力に満ちた成長していく姿と見るかは，分れるところである。

Exemplarsky は，大人はメロディやリズムだけが音楽的興味の中心だと思って強調しすぎる傾向がありはしないかといっている。

Brehmer も，子どもにとってメロディは個々の音や音程の組合わせではなく，個々に分割できない総合体であり，その進行によって感得できるものだといっている。

どうも大人は，自分で定めた目標に向ってせっかちに最短距離の道を直進させようとしがちではないだろうか。うたう活動に関していえば，じょうずに，きれいにうたわせたいと思い，音程やリズムに正確さを期したいと思う。そして歌詞をきちんと早く憶えてもらいたいと思う。

子どもは，リズムも和声も楽式も，音の高低もすべての音楽の理論や知識も，何一つ知らない関心もない。さらに必要としてもいない。子どもがうたう時，そこにあるのは音楽なのである。大人よりもっと純粋に直接的に音楽と結びついている。うたえばそのリズムに身体中が動く。歌の内容に理屈なしに入ってしまう。大人の考える歌詞の良し悪しは，子どもには何の意味も持たない。サンバのリズムはカーニバル用のもので子どものものではないとか，子どもには難かしすぎるとか，音程の跳躍や音域の広さからもて子ども向きの曲ではないなどという。いずれも子どもの音楽活動について大人が頭や観念で出した答えの域を出ない。子どもは音楽を丸ごとつかむものである。

> うみは　ひろいな　おゝきいなー
> つきが　のぼるし　日がしずむー

どうして彼は〝うみ〟をこのようにうたいたくなったのか。

この歌は音楽的側面からみれば，歌詞のリズムも抑揚も旋律のリズムや高低と合致していて問題はない。旋律線もなだらかで，水平線の果てまでも続く大きくゆったりした海を表現していることに異論はない。うたってみても飽きのこない，簡潔だが充実したいい曲だと誰もが思うだろう。

しかし，彼の>ブンチャッチャ（♩♩♩）は何としてもこの曲に似合っている。この旋律だけをきいて，またはうたってみると，頭の拍に>をつけても少しも変ではない。大人は自分がこの歌を過去に習っていたり，知っている。歌詞も知っている。自分が今までうたっていた曲とは異なった表現がなされたのである。

では〝うみ〟の歌にあらわれた異質ともとれる音楽的表現の２つの解釈の相違は，何から生じたのだろうか。前者は知識から出た結論であり，後者は音楽そのものを身体で感じて出てきた結論だといえよう。

確かにその時の子どもたちの反応は，実習生や筆者がその場に居合わせたことによる精神的な影響もあったであろう。しかし，やはり音楽を直に丸ごと受け入れて反応した結果のあらわれとみることができるのではないだろうか。子どもは音楽を直感的に直截的にそして本能的にとらえている。

しかし，子どもは発達が不十分であるから表現

が稚拙であって，自分がやろうとしていることとあらわれたこととにずれが生じたのだ。それでも自分がそうあらわそうと思えば，それで充分満足するのである。

おわりに

うたう活動においてどなり声でうたうということは，幼児の場合は単に発声に関係する諸器官だけの問題ではない。確かに，どなるまたは大きな声を出すということは，のどをつめて無理に力を入れることになり，声帯に炎症がおこり，声帯の慢性肥厚から結節へとつながることも考えられるので声帯にとっては大敵である。

肉体的緊張は，身体を動かすことによって解放することができるが，その他にも保育者が歌のムードやイメージ作りを助けたりすることによって子ども自身が欲する声量で無心に音楽に入ることができれば問題は解決するであろう。

歌唱指導とは，幼児の場合は発声指導ではない。子どもがうたうことを実感し，感じたものをうたうことができるように指導することである。感激がなければ次の高み深みへの成長は鈍くなる。成就感は発展への弾みとなる。

子どもが音楽を感じることのできる曲は，共に感じ合える保育者の働きかけを外部からの刺激として受け，子どもの内部からの精神的刺激と相まって，創造的表現の喜びに到達させることができる。

幼稚園での教育実習を終えて学生は，また次のように記している。

「うたうきっかけを作るのが教師の役目。強制ではなくがむずかしそう」

「どうしたら，子どもたちが興味をもてるように，私がうたえるかが大切」

「どうしたら意図したようにうたってくれるかが分らなかった。子どもたちが「うたいたい」「教えて」というような指導ができるようになりたい」（すべて原文のまゝ）

子どもたちがどなってうたうことについて，その身体面と精神面から考えてきたが，これは大人，保育者側からみたものであって，子ども側からのとらえは今回できなかった。どなり声を張りあげてうたう子どもに接触して，その内面を探りたかったのだが，不成功に終ったためである。これは今後の課題としたい。

最後に，御指導をいただきました川井明男教授と，今回のきゝとり調査に御協力くださった幼稚園および保育園の先生方，ならびに県短大付属幼稚園の皆さま方にお礼を申しあげます。

＜引用文献＞

小松耕輔編：世界音楽全集 11　日本童謡曲集（註），春秋社　262（昭5）

＜参考文献＞

永吉大三：新しい視点による発声法の理論と技法，音楽之友社 144（1978）

小山章三：合唱と教育と――音楽教師の手記―，音楽之友社 229（1982）

ＮＨＫ放送世論調査所編：現代人と音楽，日本放送出版協会 230（1982）

フリジエシ編　羽仁協子訳：ハンガリーの音楽教育，音楽之友社 229（1968）

品川三郎：児童発声，音楽之友社 63（1958）

フックス　伊藤武雄訳：歌唱の技法―すぐれた歌唱法への道―，音楽之友社 205（1966）

マーセル，グレーン　供田武嘉津訳：音楽教育心理学，音楽之友社 318（1969）

マーセル　美田節子訳：音楽教育と人間形成，音楽之友社 369（1967）

シューター　貫行子訳：音楽才能の心理学，音楽之友社 363（1977）